

# 外来生き物が日本在来種を襲う

*A Naturalized Species Attacks the Japanese Native Species.*

岩崎行伸

昨今、日本各地において野生種生態系に大きな変化が生じている。その要因は、招かれざる客として海外から持ち込み浸入してきた外来種の生き物たちである。

特徴的なものをあげると、全国都道府県の人家近くで猛威を振るっているのは捨て“アライグマ”の子孫たちで、氣性が荒いために飼い主に捨てられ、野生化したのである。大好きな水辺が多く、天敵のいない日本で、アライグマたちはのびのびと暮らし、農作物に大被害を与えるようになった。



図1. 日本最後の清流（四万十川/西高知）

沖縄本島で分布を広げているのは、ハブの天敵にという狙いで持ち込まれた“ジャワマングース”である。本種はハブを襲う代わりに、島の生態系の中で進化してきた哺乳類や爬虫類、鳥類を摂り最強の捕食者の座についた。沖縄本島北部の森にのみ生息する空をとべない珍鳥”ヤンバルクイナの運命は風前の灯である。

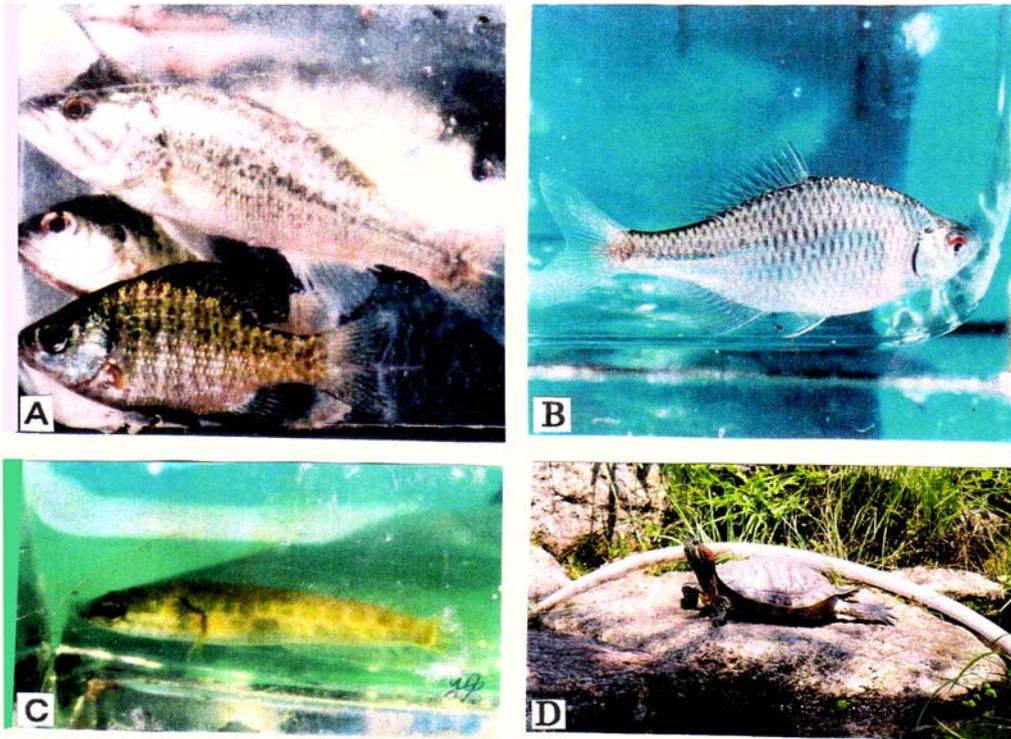


図2. 外来種の生き野たち (A:オオクチバス・ブルギル、B:タイリクバラタナゴ、C:カムルチ、D:アカミミガメ)

日本の水辺は外来ガメの楽園となりつつある。身近な池には“ミシシippiaアカミミガメ”が多くいる。千葉県印旛沼周辺には世界のかめ類の中で最も凶暴といわれているカミツキガメが大増殖中である。その近縁種で世界最大の淡水ガメ、ワニガメは（体重 100 キロ）大都会の東京上野不忍池で産卵していることが確認された。温和で小柄な在来ガメのイシガメ・クサカメたちは何処へ行ってしまったか？

かつては大量に獲れたホンモロコ・ニゴロブナ等の漁が今ではさっぱりで、地域の伝統食であるフナ寿司も手に入りにくいようである。閉ざされた湖で進化してきた在来魚が減少する一方、増加してきたのが北アメリカ原産のオオクチバスとブルギルである。在来魚から外来魚への異常な置き換えは、全国的湖沼やため池で急激に進行している。また淡水魚のニッポンバラタナゴと、アジア東部原産のタイリクバラタナゴの間でも深刻な問題となっている。

近代になって以降、動植物を問わず、日本に侵入してきた外来種の生き物は凄い数になる。造成地など人為的に攪乱された地域の増加、徐々に進行している地球温暖化等により、今後さらに多くの新顔/外来種の生き物が侵入・定着する恐れがある。

日本は外来種の生き物王国と化し、独自の生態系は定着なきまでに破壊されてしまうのか？それともまだ回避できるか？、その鍵は21世紀初頭に生きる我々が握っている。

### 参考図書

- 1) 外来種ハンドブック：日本生態学会編、地人書館
- 2) 外来生物辞典：東京書籍、池田清彦編
- 3) 自然大博物館：小学館、相賀徹夫編

### 添付資料

図1. 日本最後の清流（四万十川/西高知）

図2. 外来種の生き物たち（A:オオクチバス、ブルーギル、B:タイリクバラタナゴ  
C:カムルチ、D:アカミミガメ）

---

水棲&環境研究、会員：日本野鳥の会・昆虫写真研究会・自然研究観察会